

豊橋市普門寺所蔵僧永意起請木札の文化財科学的調査

はじめに 愛知県豊橋市雲谷町に所在する普門寺は、現在地に移る17世紀後半までは、三河・遠江国境に近い船形山山腹に展開した真言宗の山寺である¹⁾。ここに3点の墨書き木札が伝来しており、近年の愛知県史編纂にかかる史料調査に際して、その存在と史料的価値があらためて確認された²⁾。うち1点は、近世の写しから永暦2年(1161)の文書であることが知られ、平安時代院政期に遡る木札とみられる。これらは、本堂内の宮殿(厨子)の屋根が解体した折に、散乱する部材のなかから偶然見出されたもので、伝来品とはいえ劣化も著しい。

奈良文化財研究所は、史料調査に関わられた愛知県史古代史部会調査執筆委員の上川通夫氏と豊橋市文化財センターの岩原剛氏から、資料の保全などにつき相談をうけ、3点の墨書き木札の現状確認や熟観などをおこなう機会を得た。ここでは、永暦2年僧永意起請木札について、その調査成果を報告する³⁾。

表面観察と加工痕跡 縦318mm(現存)、横1160mm、厚さ19mm。板目材。上部を欠損し、本来の一行字数のうち、およそ半分が残存する。当該資料は、2016年度に(公財)元興寺文化財研究所において、表面クリーニングおよび修理が施された。修理後に改めて写真撮影の機会を得た際、修理前にはごく部分的に認められた界線を、木札の表面の全面にて確認した。界線は事書の右から12本確認され、界幅は約85mm。いずれも押界か。1つの界に概ね3行分が収められるが、墨書きは必ずしも界線にしたがつて記される訳ではない。行末の位置に地横界がある。

(山本 崇)

板材の表面は、両面とも全面にヤリガンナで調整され、平滑な板材を作り出す。ヤリガンナによる加工は、文字が書かれる前に施されたもので、加工痕跡の1つの単位の中には、3条の刃こぼれ痕跡がみられる(図47)。この特徴的な刃こぼれ痕跡は、裏面、および表面のどちらにも観察できることから、ヤリガンナによる表面調整が、裏面・表面とともに同時に施されているといえる。なお、両側の木口面の割れに薄板が差し込まれている。二次的なものと考えられるが、意図は不明である。

(浦 蓉子)

X線透過撮影による劣化状態調査 木札には虫害によると考えられる多くの小穴が観察されたため、木札のX線透過撮影をおこない、内部の劣化状態について観察した。X線透過撮影から得られた画像を観察した結果、材の長軸方向に沿った端部に虫害の孔が集中していることがあきらかとなった。材の外観の色調から、これらの部分は辺材の部分と推定される。また、小穴が認められるものの材表面は平滑な状態を保っており、一見すると深刻な状態に至っていないと考えられる部分でも、材内部は虫害による穿孔が著しい部分が散見された。したがって、木札には腐朽が進行している部分はほとんど認められないものの、虫害による穿孔が進行し、脆弱な状態になっていると考えられる。

(高妻洋成・脇谷草一郎)

樹種 木札下方側面の割れが生じた箇所から、剃刀を用いて柾目面の薄切片を採取し、プレパラートを作製して、生物顕微鏡を用いて観察した。木口面、および板目面については、木札表面を実体顕微鏡により観察した。ヒノキ型の分野壁孔が普通2個観察できることや、樹脂細胞が早晚材境界付近に観察できることから、樹種はヒノキと同定した。

年代測定 当初、年輪年代測定の希望があったが、本木札には年輪が40層程度しか刻まれていなかったため、年輪年代測定には向きであると判断し、放射性炭素年代測定をおこなうこととした。試料は、最外層付近の劣化が進んだ箇所より、年輪3層分の試料を採取した。なお、採取した部位より外側に、さらに2層分の年輪が残存していることを確認しているため、採取試料は最外層から3~5層目ということになる。測定は、株式会社パレオ・ラボに委託し、¹⁴C年代の暦年較正にはOxCal4.2(較正曲線データ: IntCal13⁴⁾)を使用した。2σ暦年代範囲

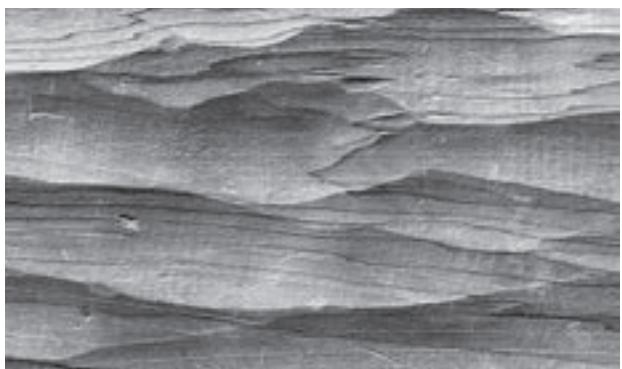


図47 加工痕跡(写真は裏面)



図48 僧永意起請木札 赤外線画像

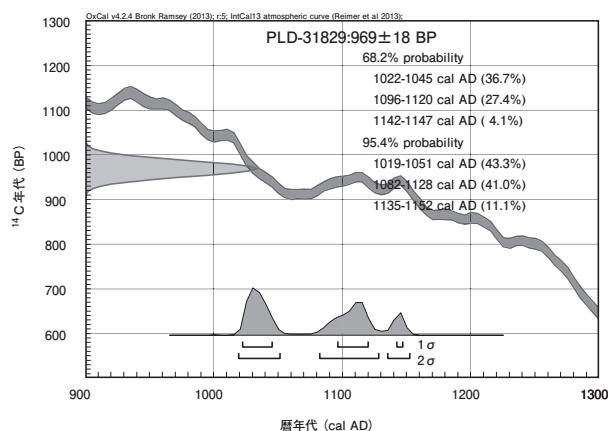


図49 放射性炭素年代暦年較正結果

は、1019-1051 cal AD (43.3%)、1082-1128 cal AD (41.0%)、1135-1152 cal AD (11.1%)で、11世紀前半から12世紀中頃までの暦年代を示した（図49）。本木札には樹皮が残存していないため、本木札の伐採年代は得られた年代よりやや新しいということになる。しかし、上方約70mm、14層分が下方より色が白く、また虫喰いがあることから、この部分は辺材と判断しており（図50）、本木札の伐採年代は得られた年代より大きく降るものではないと考えられる。

（星野安治）

まとめ 平安時代院政期に属する木の文書という類い稀なる資料について、文字資料、木製品、保存科学などの観点から検討を加えるとともに、資料の年代測定を試みた。結果、¹⁴C年代の暦年較正による木札の年代は、11世紀前半から12世紀中頃までを示した。もちろん、この年代は、あくまでも木札の年代であり、墨書が後世に写された可能性を必ずしも否定するものではないが、永暦2年という年紀や書風から推定される文書の時期と矛盾することではなく、むしろ整合的といえよう。一連の調査が資料の保全に資することを祈念し、擲筆する。（山本）



図50 辺材部と試料採取位置（写真は裏面）

謝辞

船形山普門寺ご住職の林隆清氏には、墨書木札の調査と成果の公表をご快諾いただき、（公財）元興寺文化財研究所の雨森久見氏、大久保治氏には修理後の写真撮影にご配慮いただいた。また、岩原剛氏、上川通夫氏からは多くのご教示をいただいた。篤くお礼申し上げる。

註

- 1) 近年の調査成果は、豊橋市教育委員会『普門寺旧境内一考古学調査編』豊橋市埋蔵文化財調査報告書140、2016。
- 2) 愛知県史編纂委員会編『愛知県史資料編7 古代2』1073号、2009。上川通夫「普門寺（豊橋市）所蔵永暦二年永意起請木札について」『愛知県史研究』14、2010。同「永暦二年（一一六一）永意起請木札をめぐって」『木簡研究』36、2014。など。
- 3) 年代測定の結果など成果の一部は、豊橋市美術博物館で2017年1月21日から2月26日まで開催された「普門寺と国境のほとけ」展に因んで作成された展示図録において略述した（山本・星野「僧永意起請木札の年代測定」2017）。
- 4) Reimer, P.J. et al. "IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP" Radiocarbon, 55(4), 2013.